The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	鴎外訳「新浦島」に見られる翻訳技法(1) : 底本の語順をどう邦訳に生かすか
Author(s)	中, 直一
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2014, 2013, p. 31-40
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72848
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

鴎外訳「新浦島」に見られる翻訳技法（1）

― 底本の語順をどう邦訳に生かすか ―

中　直一

1　はじめに

森鴎外の翻訳は、初期の「於母影」（初出『國民之友』1889〔明治22〕年）、初期から中期にかけて断続的に文芸雑誌に掲載された「即興詩人」（初出『柵草紙』1892〔明治25〕年～1894〔明治27〕年、『目不醉草』1897〔明治30〕年～1901〔明治34〕年）、そして晩年の『ファウスト』（1913〔大正2〕年）に至るまで、名訳との評価を不動のものにしている訳業が数多い。一方、欧語（おもにドイツ語）原文とつきあわせて鴎外の翻訳ぶりを検討してみると、意外な省略や大胆な意訳、そして思いもかけない誤訳が見られることも事実である。筆者自身、かつて鴎外の「玉を懐いて罪あり」を分析し、その翻訳ぶりを検討した結果、この翻訳作品が、「翻訳」とも「抄訳」ともつかぬ、今日の「翻訳」観からすればかなり特異な存在であることを確認し、驚いたことがある[1]。

本稿で取り上げる「新浦島」（初出『少年園』1889〔明治22〕年／初出時のタイトルは「新世界の浦島」[2]）は、「玉を懐いて罪あり」（初出『讀賣新聞』1889〔明治22〕年）と同時期に発表された翻訳であり、若き鴎外が言文一致体を試みた興味深い翻訳である。翻訳底本のドイツ語と鴎外の翻訳をざっと対比した所、「新浦島」には「玉を懐いて罪あり」に存在した様な大幅な省略は見られず、筆者自身、この翻訳は「原文に忠実な訳」であると思っていた。

しかし翻訳底本と鴎外訳を一字一句つきあわせて検討してみると、「新浦島」には、今日の翻訳者が行うであろう翻訳とはかなり異なる翻訳技法が見られる。のみならず、原文ドイツ語の一部を省略したり、あるいは原文にない文言を訳文に盛り込む等のことが――「玉を懐いて罪あり」ほど顕著ではないにせよ――「新浦島」にも見られるのである。

つまり程度の差こそあれ、初期鴎外の翻訳は、「玉を懐いて罪あり」にせよ、「新浦島」にせよ、今日の「翻訳」の在り方とかなり異なる面を見せているのである。筆者は、こうした鴎外の翻訳ぶりが、単に鴎外その人のみの翻訳観に由来するというより、むしろ明治期の日本ゲルマニスティク、いわゆる「獨逸学」の枠組み全体の中で考察されるべきものであると考えている。すなわち、「翻訳」において訳者がどの程度原文から自由であり得るかという自己意識において、鴎外もまた時代の子であり、明治期日本獨

---

[1] 拙論「森鷗外『玉を懐いて罪あり』における翻訳技法」（大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化共同研究プロジェクト2002　言語文化の比較研究』、2003年4月）を参照。

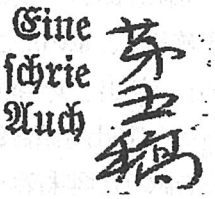
[2] 初出については、『鷗外全集』第1巻（岩波書店、1971年）pp.646-649、および小堀桂一郎『森鷗外 ― 文業解題（翻訳篇）』（岩波書店、1982年）、p.508を参照。

逸学の翻訳観と同じ土壌の中にいたと考えられるのである。

もちろんこのような問題は、単に「新浦島」の分析だけでは云々できぬ事柄であり、若き鷗外の翻訳から晩年の翻訳までを丹念に調査すると同時に、日本ドイツ学の変遷をも視野にいれて考察すべき、きわめて大きな枠組みの問題である。筆者は現在、科学研究費による研究「明治期ドイツ学の観点より考察したる森鴎外翻訳作品の史的研究」（平成25～27年度）において、上記の問題の一端を解明しようと試みている最中であるが、本稿が掲載される共同研究プロジェクト「言語文化の比較と交流」においては、まず「新浦島」に見られる翻訳技法について連続研究を行い、翻訳底本と鴎外訳を対比的に調査した上で、初期鴎外の翻訳の特質を様々な観点から明らかにしたい。

2　鴎外が用いた翻訳底本と本稿における研究姿勢

鴎外の「新浦島」は、アメリカの作家アーヴィング(Washington Irving, 1783-1859)の"Rip van Winkle" (1820)を翻訳したものである。だが鴎外はアーヴィングの英文から直接邦訳を為したのではなく、レクラム文庫に収められた独訳版[3]を翻訳底本とした[4]。現在東京大学総合図書館の鴎外文庫には、鴎外による書き込みのある鴎外旧蔵の手沢本があり、そこには鴎外の所感のほか、おそらくは初出誌『少年園』に翻訳を分載した際の、翻訳の切れ目を表すと思われる「第四稿」「第五稿」などの書き込みも見られる[5]。



従って、鴎外がレクラム文庫版のドイツ語を座右において訳出作業を行ったことにほぼ間違いないと思われる。もちろん、だからと言って鴎外が英語原文を全く見なかったということまでは断言できず、ましてや鴎外文庫にはアーヴィングの英語原書も収められているのだから[6]、鴎外が訳出にあたって英語原文を参照した可能性がないとは言えない。とはいえ、上に記した理由により、鴎外はもっぱらドイツ語訳を底本として翻訳を為したのであるから、本稿においても、ドイツ語を「底本」として、それを鴎外がどう訳したか、という問題点を調査したい。

---

[3] Irving, Washington, *Rip van Winkle*. In: *Washington Irving's Skizzenbuch*. Uebersetzt, mit Biographie und Anmerkungen herausgegeben von Karl Theodor Gaedertz, Leipzig (Reclam) o.J.（刊年無記）

[4] この点については前掲『鴎外全集』第1巻 p.646 および前掲小堀『森鴎外 ― 文業解題（翻訳篇）』p.508 を参照。

[5] Irving, a.a.O., S.67 の欄外に「第四稿」、同じく S.69 欄外に「第五稿」の書き込みがある。

[6] *Der Autor-Katalog von ausländischen Bücher in der Bibliothek des Drs. Rintaro Mori*, S.63 に蔵書番号"E200/3111"として"Irving, Washington. The sketch-book of Geoffrey Grayon, gent. Lond., &c., Cassel & Tokio, Maruya, n.d."が記載されている。なお *Der Autor-Katalog von ausländischen Bücher in der Bibliothek des Drs. Rintaro Mori* は鴎外文庫洋書リストであるが、筆者手持ちのコピー（京都大学図書館より入手）には表題紙も奥付もない。同書のタイトルも、実は筆者のコピーには欠落しており（表題紙がないので当然のことだが）、*Der Autor-Katalog von ausländischen Bücher....* というタイトルも、大阪大学附属図書館の蔵書検索で入手した蔵書情報に基づくものである。この書物の本文はタイプ打ちなので、おそらくかなり古い時代に東大図書館が作成し、全国の大学図書館に配布したものと思われる。

以下、本論文において鴎外の翻訳を検討する際、参考までにアーヴィングの英語原文を示すこととするが、上に述べたように鴎外はレクラム文庫のドイツ語版を翻訳底本としたのであるから、英文はあくまでも参考程度にすぎない。本論文の眼目は「ドイツ語を鴎外はどのように訳したのか」という、翻訳技法の解明にある。

次節以降、まずアーヴィングの英文[7]を〔参考〕として掲げ、次いでドイツ語訳（出典は本論文脚註３を参照）を〔底本〕として、そして最後に鴎外訳（出典は本論文註２に記した岩波書店版鴎外全集所収のもの）を〔鴎外訳〕として示す。引用ページは、引用文の最後に括弧にくくって示す。なおドイツ語文は東京大学総合図書館の鴎外文庫に収められた鴎外手沢本のコピーを使用した。

引用文中、点線のアンダーラインは筆者が引いたものであり、ドイツ語文と鴎外訳の相違が見られる箇所に引いた。なお参考までに、英文にも点線のアンダーラインを引いておいた。点線でない、普通のアンダーラインは、鴎外全集に見られるものである。鴎外はカタカナ書きの人名や地名に棒線を引いており（これは鴎外に限らず明治時代の翻訳によく見られた表記法である）、本論文においてはそれを普通のアンダーラインで示した。なお点線のアンダーラインと普通のアンダーラインが重複する場合は、点線のアンダーラインの方を優先して記載した。

鴎外の訳文からの引用文については、可能な限り原文（岩波版鴎外全集）の旧漢字旧仮名を再現しようと試みたが、筆者が使用するコンピューターの制約上、鴎外全集の表記（とくに旧漢字）を再現し切れなかった箇所がある。また鴎外訳からの引用において、平仮名（ひらがな）のルビは、鴎外全集で元から存在したものである。それに対し、本論文では筆者がさらに片仮名（カタカナ）のルビをも付加した。鴎外の「新浦島」は、少年向け雑誌『少年園』に掲載されたものであるとは言え、今日のわれわれからすれば、きわめて難解な漢文的語法や漢語表現が頻出する。どのように読むべきか、筆者自身非常に迷う場合も多かった。本論文では、現時点での筆者の読みを示すことにするが、この点については大方のご叱正を賜りたい。

３　語順を原文に近く訳す技法

本研究プロジェクトでは、連続研究の形で、順次、鴎外が底本の語順をどのように邦訳に生かそうとしたのか、訳文が単調にならないように底本の時制を邦訳でどのように変更したか、異国の文物をどのようにして少年読者に分かる様に和風化したかを調査し、さらには鴎外が訳文に独自の（場合によっては勝手な）文飾を施したり、逆に底本に存在した表現を訳文で脱落せしめる等の実態を紹介することとする。紙幅の都合で、本稿では、語順・文章の配列順についての鴎外の翻訳技法を検討したい。

まず取り上げるのは、底本において、一つの名詞に非常に長い修飾語句が付加されている場合である。一つの名詞にあまりに長い修飾語句が付いている場合、そのまま訳しても、意味は通じるものの、日本語として非常に収まりの悪いものになる可能性がある。とくに次に紹介する例は、一つの名詞に対して、前から複数の形容詞が修飾すると同時に、さらに名詞の後ろから前置詞句が修飾するという、そのまま

[7] Irving, Washington, *Rip Van Winkle*. In: *The Sketch Book.* By Washington Irving. New York (John B. Alden) 1887 を使用。

和訳すれば非常にゴテゴテした日本語になりかねない文章である。

〔参考〕 He was a short square-built old fellow, with thick bushy hair, and a grizzled beard. (p.35)

〔底本〕 Es war ein untersetzter, vierschrötiger alter Bursche, mit dichtem buschigen Haar und grauem Bart. (S. 65)

〔鴎外訳〕 丈は低く、力のありさうな老人、髪は濃くて箒の様になり、髭は灰いろです。 (p. 174)

この文章が登場するのは、小説の中程、竜宮城に相当する洞窟へ主人公リップを誘う謎の異国人が現れる部分である。仮に底本のドイツ語を、名詞 Bursche(やから)への修飾関係を原文に忠実に訳したとしたら、「濃くてもじゃもじゃした髪で、灰色の髭をした、背の低いがっしりした老人であった」となるところである。しかしこのような訳文だと、「老人」を形容する語句があまりに長すぎる。そこで鴎外は、底本の前半部(Bursche まで)を先に訳し、底本の後半部(mit 以下)を追加的に訳す、という処理を行った。

底本では名詞 Bursche に対し、前から形容詞が三つ修飾し、かつ後ろから長々しい前置詞句が修飾するという構造になっているのだが、鴎外は名詞の前後の修飾語句全てを一気に名詞に掛けて訳すのではなく、むしろ底本の語順の方を訳文に反映させる訳出法を採用した。そのことにより、鴎外は日本語が生硬になることを避けたのである。(なお底本の buschig〔もじゃもじゃした〕を鴎外は「箒の様になり」と訳し、また vierschrötig〔がっしりした〕を「力のありさうな」と訳しており、訳語をかなり工夫している——別の言い方をすれば、少々大胆に訳している——が、そのことについては、本稿ではこれ以上立ち入らないこととする。)

いずれにせよ、鴎外は底本における名詞への修飾関係を、そのまま直訳的に邦訳して生硬な訳文となることを避けるために、むしろ底本の語順を生かして邦訳を試みた。すなわち、底本において名詞を後ろから修飾している成分(前置詞句)を、邦訳においても、名詞の後ろに配し独立せしめたのである。

上に見たのは名詞への修飾語句が底本において非常に多い場合の翻訳術であったが、次に見るのは、目的語が長々しいため、下手に訳すと主語と動詞の関係が見えにくくなりかねない場合である。このような場合も、鴎外は底本の語順を訳文に生かしている。

〔参考〕 On the other side he looked down into a deep mountain glen, wild, lonely, and shagged, the bottom filled with fragments from the impending cliffs, and scarcely lighted by the reflected rays of the setting sun. (p.34)

〔底本〕 Auf der anderen Seite schaute er hinunter in eine tiefe Bergschlucht, wild, einsam und rauh, deren mit Stücken überhangender Klüfte gefüllter Boden nur spärlich vom Strahlenwiederschein der untergehenden Sonne beleuchtet war. (S. 64)

〔鴎外訳〕 外の側を見下せば、淋しく荒れた深い谿で、その底の岩には、許多の罅隙(われめ)が這入つて居て、所々には崖から飛出した石もあり、夕陽の光線の屈折反射した末が僅にこれを照らして居ます。 (p. 173)

主人公リップが、謎の老人と出会う直前、深山に入り込んだ時の描写である。底本のドイツ語も、そ

の原典である英語も、構造はほぼ同じである。とりわけ注目したいのは、上記のドイツ語文の前半部における動詞の位置である（後半部分は、ドイツ語文法でいう「副文」なので、動詞が文の最後の部分に配置されていて、日本語に訳してもあまり位置的に差は出ない）。ドイツ語の文章の前半部分を、仮に逐語訳風に並べるとすれば

A：反対側で／B：見た／C：彼は／D：下の方／E：山の深い谷間を／F：雑草のはえた、物寂しい、荒涼とした

となる（A～F の符号は、もちろん筆者が便宜的に付けたものである）。

この各パートの符号を、仮に（1）底本の配列、（2）鴎外の訳しぶりに沿って配列した場合、および（3）底本の修飾関係を普通に再現して訳した場合、の３種に分けて対比すると、次の様になろう。

（1：底本）ABCDEF

（2：鴎外）AB DFE

（3：普通）CADFEB

このように対比してみれば、鴎外の訳しぶりが、少なくとも上記の文章においては、底本の語順を生かした訳しぶりになっていることが窺える。仮に（3）のような訳し方をしたとしても、もちろん十分に日本語として意味は通じるが、動詞（上記の符号で言うと B）が主語（上記の符号で言う C）と離ればなれになり、生硬な日本語になりかねない。そこを鴎外は、主語の訳出を省略しつつ、動詞の位置を底本と同じく前の方に置くことにより、読みやすい訳文の形成を目指したものと思われるのである。

4　関係文と邦訳の語順

前の節では、名詞への修飾関係や主語と動詞の位置関係のレヴェルで、鴎外が底本の語順を生かした訳しぶりをした例を紹介したが、本節で検討するのは、もう少し長い、文章レヴェル、すなわち関係代名詞によって二つの文章（ドイツ文法でいう主文と副文）が結ばれている場合の鴎外の訳し方である。鴎外に限らず、およそ独文なり英文なりを翻訳する際、関係文を後ろから前に掛けて訳したり、あるいは関係代名詞の所で文章を区切って訳したり等、日本語に訳す際には、いろいろな工夫が見られる。本節では、鴎外が関係代名詞の所で文章をいったん区切って訳出した場合を見て行こう。

〔参考〕At the foot of these fairy mountains, the voyager may have descried the light smoke curling up from a village, whose shingle roofs gleam among the trees, just where the blue tints of the upland melt away into the fresh green of the nearer landscape. (p.30)

〔底本〕Am Fuße dieser feenhaften Berge hat der Reisende vielleicht schwachen Rauch aus einem Dorf aufsteigen sehen, dessen Schindeldächer zwischen den Bäumen hervorgucken, genau dort, wo die blauen Tinten der Höhen im frischen Grün der näheren Landschaft verschmelzen. (S. 57)

〔鴎外訳〕此奇怪な山の麓で、旅人はある村から立ち騰（ノボ）る、弱々しい烟を見ましたらう。丁度あの晴れた空の青「インキ」が、近い林の緑色に移り行く所で、木の間からちらちら[8]と屋根の見える

[8] 原文（岩波版全集）の表記では「ちらちら」の後半の「ちら」には繰り返し符号（所謂「くの字点」）が使用されているが、本論文ではフォントの制約上、繰り返し符号を使用しなかった。

村です。 (p. 167)

これは小説の冒頭、主人公リップの住む村の様子を描写した部分である。底本で「先行詞＋関係代名詞」という構文になっていたものを、鴎外は二つに区切って訳出した。当然、底本の先行詞（この場合はDorf「村」）を、分割した二つの文章の両方において用いることになる。この技法自体は、とりたてて鴎外オリジナルとはいえない。普通に見られる技法である。だが、次のような例はどうであろうか。

〔参考〕Here he would sometimes seat himself at the foot of a tree, and share the contents of his wallet with Wolf, with whom he sympathized as a fellow-sufferer in persecution. (p.34)

〔底本〕Hier setzte er sich manchmal am Fuß eines Baumes hin und theilte den Inhalt seines Quersackes mit Wolf, mit welchem er als verfolgtem Leidensgefährten Mitgefühl empfand. (S. 63)

〔鴎外訳〕さて山の中では、折々木の根に腰を掛けて、嚢（フクロ）の中の物をヲルフに頒けてやります、この同じ危難に遭つて居る同病相憐む獵犬のヲルフに。(p.172)

主人公リップが飼い犬ウルフ（ヴォルフ）を連れて、恐妻から逃れて深山に入る場面である。恐妻家である主人公と同様、飼い犬もリップ夫人を恐れているので、鴎外は「同病相憐む」という、底本には存在しない表現を訳文の中に盛り込んでいるが、本稿ではさしあたり鴎外の独自の付加についてはさておくこととし、ここで問題にしたいのは、むしろ、飼い犬を説明する関係文の訳し方である。

鴎外が用いているのは、単に関係文を別の文章にする、という技法ではない。底本の一文章が、鴎外訳でも一応一文章になっている。しかし実質は、「……頒けてやります」のところで訳文が一端途切れ、「この同じ……」以下が、追加的な文章の形で前の文章に接続している。それでは何故鴎外は「……頒けてやります」の後を、句点でなく読点にしたのであろうか。

もし、そこが句点であり、完全に二つの文章に分けたと仮定しよう。そうであるなら、後半の文章は——他の箇所の鴎外の訳しぶりから再構成するに——たとえば「同じ危難に遭つて居るは、同病相憐む獵犬のヲルフです」とでもなるところであろう。

上に筆者は「他の箇所の鴎外の訳しぶり」という言い方をしたが、本研究プロジェクト次号以下で詳細に見る様に、実は鴎外の訳文の中には非常にしばしば、底本で「AはBした」となっている構文を、「BしたのはAです」という風に変形して訳している。何故その様な翻訳法を採用したのかについて実例を挙げつつ分析するとすれば、それだけで一つの論文になってしまうので、ここで詳述するだけのゆとりはない。ここでは結論のみを挙げるに止めるが、鴎外が「新浦島」の随所で採用した「BしたのはAです」という構文は、いま検討している箇所で使用するにまさにうってつけである。にも拘わらず鴎外は、ここでは好みの翻訳法を敢えて採用していない。何故か。

鴎外が底本の関係文を追加的に訳したのは、様々な訳文の型を提示することにより、多彩な文章表現を訳文に盛り込みたかったからではあるまいか。つまり「同じ危難に遭つて居るは、同病相憐む獵犬のヲルフです」という、「BしたのはAです」型でなく、あえて「この同じ危難に遭つて居る同病相憐む獵犬のヲルフに」という、余韻を響かせる文体を用いることにより、鴎外は訳文に日本語としてのバリエーションを付加せしめたと考えられる。

そしてそのようなバリーションを付与するために、句点でなく読点を使用したと考えられる。してみ

ると、鴎外の訳文にあっては句点と読点についても、細心の注意が払われていることが窺えるのである。

上の例では、底本の先行詞 Wolf を訳文において二度登場せしめ、最初のものには何ら修飾語句をつけなかったが、次に見るのは、最初に登場する先行詞（の訳）に、鴎外が修飾語句を付加した例である。

〔参考〕 On waking, he found himself on the green knoll from whence he had first seen the old man of the glen. (p. 37)

〔底本〕 Beim Erwachen fand er sich auf dem grünen Hügel, von dem aus er zuerst den alten Mann im Hohlweg erblickt hatte. (S. 67)

〔鴎外訳〕 目が覺めて視れば、また原(モト)の緑の岡の上に居ました、丁度あの異(アヤ)しい桶を擔うた男を始めて見た所に。 (p.176)

主人公リップが、見知らぬ異国の人々の酒を飲んで二十年の長い眠り（そしてリップ本人にとっては一夜の眠り）から覚めた場面の描写である。底本では Hügel（岡）が先行詞になっていて、そのあとに関係文が続く。これを鴎外は二つの文章に分けて訳した。そのこと自体は、翻訳技法として特別のものではない。本論文で注目したいのは、鴎外が「緑の岡」という語句の前にさりげなく「原の」という、底本にはない修飾語句を付加したことである。この技法によって鴎外は、後続の「丁度……」以下に続く関係文の内容を、短いながらも先行して提示する機能を持たせたものと考えられる。

上の例だけ見れば、何も取り立てて云々するほどのこともないように思われるかも知れない。だが次節で見る様に、鴎外は底本における一つの文章を二つの文章に区切って訳出する際、単純に二つに切り分けるのではなく、切り分けた和訳の文章の両方に関連語句を盛り込む、という技法を見せている。詳細は次節に譲るが、そのような鴎外の技法を知る我々としては、いま分析している関係代名詞の文章においても、鴎外が「原の」という、底本にない表現を盛り込んだ理由として、二つの文章に切り分けつつ、その両者に共通する成分が存在することを読者に知らしめる為であったと思われるのである。

最後に紹介するのは、すこし複雑な鴎外の翻訳技法である。以下に示す様に底本のドイツ語は関係代名詞を含む長い文章になっている。鴎外はそれを二つの文章に区切って訳したのだが、その際鴎外は、関係代名詞の箇所で区切らず、一見すると実に中途半端な所で切っているのである。（以下、分かりやすくするために本論文においてここまで使用してきた点線のアンダーラインに加えて、波線のアンダーラインも使用するが、もちろんこれは筆者が加えたものである。）

〔参考〕 He again called and whistled after his dog; he was only answered by the cawing of a flock of idle crows, sporting high in air about a dry tree that overhung a sunny precipiece; and who secure in their elevation, seemed to look down and scoff at the poor man's perplexities. (p. 38)

〔底本〕 Er rief und pfiff wieder nach seinem Hunde, doch erhielt er nur durch das Krächzen eines Schwarmes müßiger Krähen Antwort, die hoch im Aether um einen dürren Baum, der über einem sonnigen Abgrund hing, flogen und, in ihrer Höhe gesichert, hinunterzuschauen und ob des armen Mannes Unruhe zu spotten schienen. (S. 69)

〔鴎外訳〕 かれは又た口笛を吹いたり、ヲルフの名を喚んだりして見ても、應へるものは遙に高い

枯木の周匝(シウサフ)を飛んで居る惰鴉(なまけがらす)の一群ばかりです。かれ等は高い處から、この氣を揉んで居る人間を見卸して、馬鹿にする樣に見えます。(p. 178)

これは主人公が長い眠りから覚めて、連れてきた飼い犬の名を呼ぶシーンである。ドイツ語では、リップの頭上を飛ぶカラスについて、関係文による長い修飾（関係文の中に、さらに接続詞 und で結ばれる二つの文章が存在する形）が施されている。英文では分詞構文と関係代名詞が crows を修飾する、という形になっているが、いずれにせよ、「カラス」を修飾する非常に長い文章が存在する。鴎外は底本の長い文章を二つに区切って訳したのであるが、実は関係代名詞のところで区切ったのではない。

底本では二行目に先行詞と関係代名詞（Krähen ....., die）がある。もし単純に関係代名詞のところで区切って、しかも鴎外の訳語を活用するならば、「かれは又た口笛を吹いたり、ヲルフの名を喚んだりして見ても、應へるものは惰鴉(なまけがらす)の一群ばかりです。かれ等は、遙に高い枯木の周匝(シウサフ)を飛んで、高い處から、この氣を揉んで居る人間を見卸して、馬鹿にする樣に見えます」となるであろう。この訳では波線と点線が、ほぼ底本の位置と合致する。

ところが実際には、鴎外はまず波線の部分を「惰鴉」に修飾せしめるように訳し、そののち関係文の後半部分を独立させて一文とした。実際の鴎外の訳文では、波線の部分が前の文章に含まれ、句点に続く次の文章では点線の部分のみが独立して訳出されている。これは、中途半端といえば中途半端な訳し方であるが、それでは何故、鴎外は敢えてこのような訳出法を採用したのであろうか。

底本の関係文は、上に記した様に、それ自体がまた二つの文章で構成されていた。つまり関係文自体が非常に長い文章である。鴎外の発想を推測するに、この長い関係文自体をまず二つに区切ることにより、「惰鴉」という語への修飾関係を分かりやすくする訳文にしようとしたのではないか。

だが、もし底本の長い文章を関係代名詞の前後で一端区切り、さらに関係文自体を二つに区切ったとすると、結果的に訳文は三つの文章から構成されることになる。そうすると、今度は却って「惰鴉」への修飾語句がバラバラに存在することになり、また場合によっては「惰鴉」という語を三度繰り返したり、あるいはそうしないまでも「かれ等」という語を何度も繰り返すという、生硬な訳文になりかねない。鴎外はそのような煩雑さを避け、関係文の中にある前半部分については、これを先行詞に相当する「惰鴉」に修飾せしめる形で訳出し、関係文の後半部分のみを独立して一つの文章に訳出したのである。

本節の最初のところで分析した様に、鴎外は関係代名詞を含む長い文章を訳出する際、底本の文章の配列を受け継ぎつつ、二つの文章に区切って訳す技法を見せた。しかし鴎外はそれだけでなく、最後の例で見た様に、関係文の一部のみを先行詞に掛けて訳すという、別種の技法をも見せている。底本の語順（文章の配列順）を尊重する訳しぶりと、必ずしもそうでない訳しぶりが混在しており、それが「新浦島」の訳文に多様性・多層性をもたらしているのである。

5　文章の分割にともなう重複訳の技法

前節では関係代名詞を含む文章を二つに区切った例を検討したが、本節では、鴎外が底本の一つの文章を単に訳文で二つに区切ったのではなく、底本に存在した一つの表現を、区切った二つの文章の両方に入れ込んだという、少々複雑な例を検討して行く。

〔参考〕… and a curtain lecture is worth all the sermons in the world for teaching the virtues of patience and long-suffering. (p.31)

〔底本〕… und eine Gardinenpredigt wiegt alle Predigten der Welt auf, um die Tugenden der Geduld und langen Leidens zu lehren. (S. 58)

〔鴎外訳〕……善人になるには、世界中の高僧の説教(ママ)を聴くより、女房の窻帷(まどかけ)の下の説經を聴くに限ります。この説經の外に、まあ何が柔和と忍辱とを教へませう。 (p.168)

主人公リップの恐妻家ぶりを描写している部分である。底本では一続きの文章になっているが、鴎外訳では、見ての通り二つの文章になっている。一見すると、単に「底本の長い文章を、翻訳に際して二つの文章に区切った」だけであるように見える。だが注目すべきは、鴎外訳の最初の文章にある「善人になるには」との表現である。

本プロジェクト次号以降に掲載する予定であるが、鴎外はしばしば、底本に存在しない表現を自由気ままに己の訳文の中に盛り込む、ということを行っていた。訳者としての分限をいささか越えて、いわば作家としての判断で、底本を越える訳文を創出したわけである。そのような実例を知っていただけに、最初に筆者が上に引いた鴎外訳を見た時、「善人になるには」の部分は、鴎外による純然たる付加の文章であると思えた。

だが仔細に検討すると、どうもそうとばかりは言い切れない。点線を引いた底本の当該箇所は、"um + zu +不定詞"の構文になっている。英文では"for teaching"となっているが、ドイツ語の方では、いわば"in order to teach"に相当する構文を使用している。鴎外は、目的を表すこの構文において、訳文を前半と後半に切り分けた。そして「……するために」にあたる日本語を、己の訳文の後半部分には入れず、前半に「善人になるには」という形で提示し、そして底本の語彙を訳した文章は己の訳の後半に、しかも感嘆文の形に変形して配置したのである。つまり鴎外は、底本の文章を単に物理的に前半と後半に分けたのではなく、まず最初の訳文で原文の後半部のエッセンスを先取りして述べ、二つ目の訳文でその内容を、底本の字句に密着して（とはいえ全くの字句通り、というわけではないが）、構文を変形して述べたのである。

次に示すのは、底本において、名詞の後ろに、それを修飾する長い副文が続く場合である。鴎外は、これを二つの文章に分けて訳したが、その際、当該の名詞を二度訳す、という手法を用いている。しかもその際、長々しい修飾語句は二回目に登場する名詞に付加すると同時に、一回目に登場する名詞は、単に名詞のみを提示するのでなく、二回目に出てくる長い修飾語句を予示するような語句を新たに付け加えている。

〔参考〕... and how sagely they would deliberate upon public events some months after they had taken place. (p.33)

〔底本〕... und wie weise berathschlagten sie alsdann über öffentliche Ereignisse, nachdem sie vor einigen Monaten stattgefunden hatten! (S.62)

〔鴎外訳〕聽く人は紙上の政治問題に就いて、まあどんなに賢く議論をしましたらう。この既に二三月前に濟んだ問題に就いて。(p.171)

主人公リップが足繁く通う、村人の溜まり場を描写した部分である。村人達は、溜まり場でいつも無駄話をしているが、たまさか新聞(それも数ヶ月前の)が手に入ると、熱心に政治問題を議論したという件で、底本の sie(彼ら)とは、溜まり場に集う村人を指す。

鴎外訳のうち「紙上の政治問題に就いて」に相当するような文言は、底本には存在しない。これも前出の訳しぶりと同様、一見すると、前後の文脈に応じて鴎外が適宜付加した語句であるかのように見える。だが実は、鴎外訳の後ろの文章で出て来る「この既に二三月前に濟んだ問題に就いて」を、いわば先取りしてそのエッセンスを述べる役割を果たしている。

底本で一続きになっている文章を、単純に二つに区切るとすると、たとえば「彼らは公の出来事について、どれほど賢明な議論を重ねたことであろう。数ヶ月も前に生じた公の出来事だというのに」とでもなろう。この私訳では、「公の出来事」を単に二度繰り返したのみである。もしもこの私訳の訳し方を取りつつ、上の鴎外の訳語を使用して再現するなら「聽く人はかの問題に就いて、まあどんなに賢く議論をしましたらう。この既に二三月前に濟んだ問題に就いて」とでもなるところである。鴎外はそうしないで、最初の「問題」を「紙上の政治問題」という風に、自らの言葉による補いを付加した。

つまり、底本で一つの文章になっているものを、二つの文章に区切って訳す際に、原文の字句に密着した訳は後半に出すにしても、そのエッセンスに当たる部分を、自らの言葉で先行して提示しておく、という翻訳技法を鴎外が有していたことが判るのである。

6　小括

以上、本稿で取り上げた実例から分かる様に、鴎外は邦訳を為すに際し、底本の長々しい修飾語句、あるいは関係文に代表される長い文章を、適宜底本の語順、あるいはその文章配列を生かしながら邦訳する、という技法を見せていた。その際鴎外は、底本の配列を生かすのみならず、必要に応じて、後ろにある語句のエッセンスを訳文の前の方に予示するかの様に配したり、あるいは後ろに配する筈の文言を敢えて前に配したり等と、単純一様でない訳しぶりを見せている。

こうした鴎外の訳しぶりは、翻訳に従事する者にとって、色々と参考になる。ただし注意しなければならないのは、鴎外がいついかなる場合でも底本の語順を邦訳に生かそうとしたわけではない、ということである。本稿では関係代名詞を含む文章を二つに切り分けた実例を紹介したが、鴎外の訳には、関係文を後ろから前に掛けて訳し、結果的にかなり長い邦訳となるというケースも存在する。修飾語句に関しても、底本の語順を生かそうとした場合もある一方、底本の語順とはかなり異なる訳し方を見せている場合もある。そうした実例は、本研究プロジェクト次号以下で詳しく見て行くが、我々としては、鴎外が様々な（時として相異なる）翻訳技法を駆使していたことを念頭に置きつつ、本稿では、その技法の一つである「底本の語順を生かす」技法の実態を知り得たことを以て十分とする次第である。